

平成4年4月30日

日本細菌学会 関東支部ニュース

第17号

第67回日本細菌学会関東支部総会の開催にあたって

第67回日本細菌学会関東支部総会を来る6月19日(金)、20日(土)の2日間に亘り昭和大学上條講堂にて開催させていただくことになりました。

最近の支部総会では支部の活性化をはかるためにいろいろ努力がなされてまいりましたが、今回もその一端を荷うべく、二つの新しい企画を試みることにいたしました。一つはシンポジウムや特別講演を行わずに一般講演のみにすることです。支部会員は細菌学会会員の半数に達しており、シンポジウムを行わなくても支部会員による支部会員のための支部総会を行うことができるのではと思われたからです。演題を募集いたしましたところ、総数44題の応募があり多数の会員のご支援を得ることができました。また、シンポジウムを組むことのできない少数派のユニークな研究にも十分な発表時間を提供すべきであるとも考え、本人の研究を主体とした総説的な講演も募集しましたところ、応募者の25%の方々が希望されました。一般講演のみを行うことについても賛否両論があることは重々承知しておりますが、活発な討論によってカバーできるのではと考えております。もう一つの新しい試みは演者の顔写真を抄録集に掲載することです。これは、会員がお互いの研究や人となりを良く理解し合うために、そのきっかけを写真がつくってくれればと思ったからです。いくらかの抵抗はありましたが大多数の演者の方々は支持して下さいました。

総会第一日は方法、毒薬、遺伝、病原性因

昭和大学教授

(医学部細菌学)

総会長 島村忠勝



子、第二日は疫学、感染、免疫のプログラムを編成しました。講演内容については3月の日本細菌学会総会と重複するものは割合少なく、多くの新しい情報を得ることができるものと期待しております。学会での楽しみの一つである懇親会はすべての講演の終了後、昭和大学病院入院棟17階レストランで行います。会員の皆様への感謝の意をこめてご招待させていただきます。会員相互の親睦をより一層深めていただければ幸甚に存じます。

終わりにあたり、支部総会の運営の機会を与えてくださいました徳永前支部長はじめ前評議員の方々に厚く御礼申し上げます。また、この度演題を応募して下さった会員の方々ならびに座長の労をとってくださる方々に御礼を申し上げるとともに、支部の活性化と支部総会の成功のために会員の皆様の暖かいご援助とご協力を切にお願いする次第です。

浅川賞を受賞して

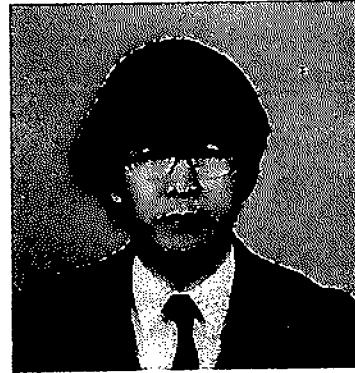
先に盛岡市において開催されました第65回総会（総会長吉田昌男岩手医大教授）において、本学会の最高の榮譽である浅川賞を頂きました。誠に光栄なことで、身の引き締まる思いをいたしております。御推薦いただきました東大医科研吉川昌之介教授、御支持頂いた学会理事長小沢敦先生初め関係各位の先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。慶応大学医学部石村巽教授、京都大学理学部大矢博昭助教授、帝京大学医学部国井乙彦教授を初めとする多くの共同研究者、特に実際の実験を担当遂行した若手研究者には深い感謝の念を捧げたいと思います。また当日は来賓として北里研究所大村智所長がわざわざ来盛され、浅川賞についての由緒を御説明下さいました。この賞は弟子の浅川範彦博士の逝去を悼んだ北里柴三郎先生が中心になり、1908年に設立されたもので、本学会の賞となったのは1959年から、私は70件目の受賞とのことでした。

さて、我が国など先進諸国におきましては、細菌性の伝染病がほぼ制圧され、感染症の病態が変わって参りましたことはご承知の通りです。しかし実際には多くの患者さんが感染症で亡くなっている現状を見ますと、感染防御の研究は今後は益々重要になってくるのではないかと信じられます。生体の非特異的防御機構は感染防御のネットワークにおいてはその土台の様なもので、その重要性が一般にはなかなか認識されません。特に食細胞は感染初期の防御に働いているばかりでなく、抗原の提示やメディエーターによるリンパ球への働きかけ、そしてリンパ球によって活性化されたあとの強力な防御、治癒にいたる病巣のクリーニングなど、感染のどの時期にも重要な役割をしております。そこで食細胞の機能や、体液性の防御機構に破綻が生じた場合の生体への影響は、それが土台であるが故に多大であり、その重要性がはっきりと浮かび上がって来るわけです。

私どもが研究を進めて参りました、食細胞

（東京大学医科学研究所教授）

金ヶ崎 士朗



による活性酸素（スーパーオキシドアニオン）生成に関する研究も、慢性肉芽腫（CGD）という、その食細胞がこの機能を欠いているために、生命に係わる重篤な細菌真菌の感染を繰り返す遺伝的疾患が存在することにより、その重要性が認識されています。この疾患は現在、遺伝的には4つの病型に分類されており、その蛋白質も分離同定されておりますが、食細胞によるスーパーオキシドアニオン産生系の全体像はまだはっきりしません。私どもはその重要性の上からも、1つ1つ解き明かす努力を今後も続けたいと考えております。また私どもが見い出したBリンパ球におけるスーパーオキシドアニオン産生系には好中球と同じ電子伝達の仕組みが使われているようですが、抗原刺激によって少量産生される（好中球の百分の一程度）この活性酸素分子種が、何のために細胞外に放出されるのか、その制御機構は食細胞とどのように異なるのかなど、重要な問題が目白押しに並んでおります。私どもは、このような問題へのアプローチが、生体の感染防御機構を解明するのに有効であると信じております。今回私どものこのような研究が浅川賞として取り上げられましたことは誠に意義深いことではないかと考えられ、これらの問題に興味を有する多くの若手研究者のグループへの参入を望みたいと思います。

フォーラム

「重箱の隅と自画自賛と」

生物学療法研究会

新井 正

私もまだ少壮気鋭と思っていた頃、はじめて国際会議の組織委員を命ぜられた。プログラム委員会で白髪の長老の先生がプログラムの英語は Program にすべきか、Programme にすべきかで滔々と 30 分程の論議を展開された。偉い先生方の一言一句にわたるこのような審議が続き、私は密かにこのような議論は恐らく Far East の日本国に於てのみ見られる光景であろうと考えた。

一昨年、はしなくも国際医真菌学会の真菌症命名委員会委員を命ぜられた。私以外はすべて英語圏の委員であるのに辞身し一旦は丁重に辞退したが、たつての依頼に恐る恐る引き受けた。蓋をあけてみると英語圏の大家の集まりの論議も前述の会議と大同小異であった。私の担当の一例をあげれば Tumor は癌であるか、腫瘤であるかと一般辞書から医学辞典を論拠の手紙の往復を繰り返すこと数回、最後は辞書も所詮は人の作製したもので絶対ではないという、結論にならない結論に終わった、などである。

年をとるとこのような重箱の隅を突くような仕事をえてして頼まれるし、私も結構楽しんで務めるようになった。日本細菌学会編纂の微生物学用語集第 4 版も一年遅れで漸く刊行の運びとなった。新時代に即応して医学に偏らないことを目標にしたが、委員の方々は勿論、各方面の泰斗に大変お世話になり通覧(通読はまだしていない)すると随所に色々な思い出が蘇り感慨深いものがある。学協会を代表する方々には献本と御礼を述べる紙数もあったが、個人的に御教示を得た先生には失礼した向きも少なくない。「口腔」「鼻腔」は漢字の音訓に拘らず「こうくう」「びくう」と読むが、明解な理由を教えて戴いた(用語集 4 版参照)のは永く日本医学会で医学用語辞典の編纂に携わられた東邦大学伊藤隆太名誉教授であった。遅ればせながらその他貴重な資料と示唆を頂いた先生に深謝申し上げる。

「A君のこと」

東京歯科大学

奥田 克爾

私は研究室に残ったとき、教育に関わることになるということをほとんど意識しなかった。研究そのものにしか関心がなかった。

A君は、私の高校時代の恩師の息子である。祖父が歯科医であることから歯学の道を選び、入学してきたのは10年前のことである。同郷であることから、県人会で同席したのが初対面であった。「僕は酒が大好きなんです。ビールなんか無限に飲めます。」などと話していたが、帰りの電車の中で吐かれて四苦八苦しながらも、その若さになんとか羨望をいだいたことなどを昨日のように記憶している。

クラブ活動の少林寺拳法ではメキメキ上達し、先輩たちからは相当可愛がられたらしく、コンパのたびに飲まされていたようである。

教養の2年になってからは欠席率が50%を越え、とうとう落第してしまった。その時彼は恩師と共に突然やってきて、「今後こんな怠慢はしません。」と誓った、そして欠席は多いものの、無事専門課程へ進学した。ところがホットしたのもつかの間、再び欠席オーバーを繰り返した。連絡がとれず様子を見にアパートへ行ったら、押入れの中で3日間も寝ていたこともあった。生活のリズムが崩れると周囲の者は精神科医に相談したりするようであるが、安易な投薬も多いように思える。彼の場合もハルシオンなどの副作用による躁うつが激しかったようだ。そして8年目の春、退学願いが提出された。大学生の登校拒否の何人かの例を知っているが、A君のような例も少なくない。安易に薬に頼る前に適切な指導ができないものかと、あらためて教育に関する本を読みはじめています。

その後恩師からの手紙で、A君は都内のコンピューター会社で元気に働いていることを知った。このA君との関わりから、教育の難しさなどさまざまなことを学んだ。

皆様のご投稿をお待ちしております。

『偶然の一致』

ブリストル・マイヤーズ スクイブ研究所

沖 俊 一

重要な発見や発明がほぼ同じ頃になされることが、最近益々多くなってきた様に思う。コミュニケーション、情報量の多さに起因しているのであろうか。

約20年前の事だが、ウイスコンシン大学マッカードゥル癌研究所に在籍していた頃、隣の Dr. テミン研究室から水谷哲博士が「逆転写酵素の存在が実証できた」と興奮して私の研究室へ飛び込んできた。丁度その頃ホルティモア博士 (MIT) も又、同じ発見をし、Nature 誌に投稿しようとしていた。幸いに両論文が同時に発表され、ノーベル賞受賞を分かち合ったエピソードがある。我々の研究領域でも例えば、放線菌等が生産する新抗生物質の発見が、同時期に日本と米国、A大学とB社、A社とB社で、しかもまったく異なった遠隔の土壌から分離された微生物から生まれ、特許・学会・論文で発表され、一喜一憂することがある。企業の場合には特許が将来の成否を決めると言っても過言ではなく、権威を獲得することに必死である。

新規な作用機作で注目を集めている抗真菌抗生物質 Benanomicin (微化研-明薬) と Pradimicin (ブリストル・マイヤーズスクイブ) は、日本と米国への出願日 (11/2/1987) が全く同じと言う偶然の一致であった。Benanomicin は微化研内の土壌から分離された Actinomadura から、Pradimicin はインドの土壌から分離された同属菌種から、それぞれ発見された。超強力な抗癌作用と特異なエンジン活性部位を有する Esperamicin (ブリストル・マイヤーズスクイブ, 1985) は、FR-900405 (藤沢, Esperamicin の N-Et 体, 1985), Calicheamicin (レダリー, 1985), Veractamycin (パークデービス, = Esperamicin, 1985) と前後して発表され、1965年発見の Neocarzinostatin クロモホアが bicyclo [7, 3, 1] diyene 構造を有することも、この頃に明らかになった。

この様な例は枚挙にいとまがないが、何故、同時期に、日本とインド、日本と米国という遠隔地の試料から、しかも異なった菌種(株)から同一の新規なユニークな構造を有する抗生物質が発見されるのであろうか。何らかの情報からヒントを得て、アイデアがスクリーニング法に応用される一方で、微生物は何十万年の間に環境条件で変異・淘汰され、分類学上は異種とみなされても抗生物質生産に関与する遺伝子は保存され続け、鋭敏な検出法と特異なスクリーニング法によって釣り上げられるのであろう。今後もこのスリルに富んだ新抗生物質発見競争は激しさを増すであろう。

『はずれもののはずれ話』

静岡県立大学薬学部

柳原保武

日本細菌学会関東支部にお世話になるようになって30年程になります。静岡は東海四県の一つで行政的には中部圏内にあり、多くの学会活動が東海支部あるいは中部支部の下で行なわれています。しかし、私の研究室では開講当初から関東支部に所属し違和感を覚えたことはありません。静岡から見れば東京も名古屋も距離的には変わり無いのですが、東京の方から見ると静岡は関東圏内に入らない「はずれ」にあります。昭和47年に関東支部総会が静岡で開かれた際、静岡というところが「はずれ」であることを実感された方も多かったと思われます。東京まで「ひかり」で1時間、静岡から通勤している友人もありますが、やはり「はずれ」です。確かに時間的には都心まで東京近郊の人たちとあまり変わらないかもしれませんが、運賃や宿泊代が嵩み、簡単には通えず、また泊まれないなどの問題があるからです。ただ、東京を中心とした生き馬の目を抜くような競争の烈しいところと違って、「はずれ」ではそれなりの良さを味わうことができ、昼の腹ごなしに飯の種であるライム病媒介マダニの採取に富士山まで出かけることもできます。私は今まで何とかスピロヘータを主な対象としてよよろと走ってきましたが、軌道からはずれて消え去

ることも無く研究らしいものに従事できているのも関東支部の強い求心力が働いていたからに他ならないと感謝している次第です。

近年、当支部でも活性化が云々されていますが、「はずれ」にも努力を重ね、研鑽を積んでいる若い人が沢山います。そのような「はずれ」の若い人達の励みになるような国の施策を心から願っている次第です。支部では若い人を対象に「The best presentation of the year」あるいは「The best paper of the year」のようなものを評議員の先生に選んで頂いて表彰しては如何かとも思っています。

【科学のスピード化】

北里大学医学部

井上 松久

細菌学も含め微生物学を取り巻く環境は、他の科学分野と同様、その内容は驚異的なスピードで進展し続けており、新しい事実も次々と解明されている。それに伴ない内容も一層専門的になりつつある。一方これらの新しい事実や内容の解明を如何に講義に取り入れるか、授業時間数との兼ね合いで、時に困ることがある。そもそも講義は、学生に対して共通の言語、思考力の育成を目的としているだろうし、講義を通じて集積された能力こそが、将来、理論と実践を振り省り、己を向上させるために必要な知的洞察力や技能の基礎をなすと考え、講義内容の充実が一層要求される。変化に富んだ個性ある授業内容としたいし、臨床を十分意識した講義や実習を行いたい。そのため、先ずは関連各教育担当者との話し合いや教育内容について十分討論し、重なり合っている部分の修正を行う。更に足りない分野については、可能な限り大学内外から関連領域のスペシャリストや教育スタッフに参加していただき、密度の濃い講義としたいと考えている。

科学のスピード化は、研究者の専門領域の多様化を招き、それぞれの専門を益々狭い範囲に収束させているといっても過言でなからう。それに伴ない特定領域は理解できるが、そうでない領域は自然と足が遠退いていく方

向に流れそうである。この状態が続くと、最終的には、恐らく限定された者以外は細菌学そのものに対して興味を抱く者は少なくなり、延いてはこの分野での教育者や研究者を育てることが出来なくなる。この傾向が進むと、人事のみならず研究の停滞を招き、学会活動にも影響を及ぼしかねないと思う。

科学の早い展開は思わぬ方向に発展することも事実であるが、4月から始まる微生物学の授業を前に、魅力ある講義内容を行うにはどうしたらよいか、当分苦しみそうである。

【私の研究所】

国立小児医療研究センター

竹田 多恵

国立小児病院は昭和40年に日本最初の小児専門施設として設立されたものですが、当研究センターは59年10月に、昭和天皇在位50年記念事業として増設された付置研究施設です。診療と研究を一貫して行える小児の総合医療施設、ナショナルセンターを目指しています。この研究施設は診療や臨床検査業務とは独立して研究のみを専門としています。現在、病理・病態、内分泌・代謝、免疫アレルギー、先天異常、感染症、実験外科・生体工学、小児生態、小児薬理の8部門があって、スタッフは各研究部に部長、室長、研究員がそれぞれ1, 2, 1名います。それ以外にレジデントや流動研究員制度でスタッフが補われています。

医療の現場からの切迫した意見や示唆が得られ、臨床的な意義について常に教えられる場所として大変恵まれています。研究費や設備の面でも比較的恵まれているものの、ただ、学生さんの数が少ないため、にぎやかに競合する刺激に乏しいのが悩みです。過日、盛岡での細菌学会で、大変若手の方が、シンポジストとしてベテラン学者に混じって堂々と、生き生きと演者を務めていらっしゃる姿に感動しましたが、このようなスター、アイドル（少し言葉が俗っぽいですが）的な青年こそ学会活性化の先導力だと思ったことでした。研究を目指されるお若い方、一度ご来所下さい。

集 会 案 内

- 平成4年度日本微生物株保存連盟 (JFCC) 総会
日時：平成4年6月12日 10:00～17:30
場所：理化学研究所レーザー棟大会議室
問合せ先：〒351-01 埼玉県和光市広沢2-1
理化学研究所微生物系統保存施設辨野義巳
☎ 0484-62-1111 (内線5121)
- 第39回毒素シンポジウム
日時：平成4年7月15～17日(水、木、金) 15日13:00～, 17日～12:00
場所：「四州園」兵庫県洲本市小路谷1052-2
問合せ先：第39回毒素シンポジウム事務局
〒770 徳島市山城町西浜傍示180
徳島文理大学薬学部微生物学教室永浜政博
☎ 0886-22-9611 (内線5833) FAX：0886-55-3051
- 第8回「細菌の病原性とその分子遺伝学」研究会
主題：応用開発研究の現状と将来展望
日時：1992年7月24日(金) 13:00～18:00
場所：東京大学医科学研究所講堂
- 第3回日本生体防御学会
日時：平成4年7月27～29日(月～水)
場所：野口英世記念会館東京都新宿区大京町
問合せ先：〒108 東京都港区白金台4-6-1
東京大学医科学研究所細菌感染研究部内
日本生体防御学会事務局金ヶ崎士朗
☎ 03-3443-8111 (内線310)
- 第21回薬剤耐性菌シンポジウム
日時：平成4年8月27, 28日(木、金) 27日14:00～, 28日～15:00
場所：伊香保温泉「観山荘」
内容：疫学, 耐性機序, 作用機序 抄録締切り：7月1日
問合せ先：〒371 前橋市昭和町3-39-22
群馬大学医学部薬剤耐性菌実験施設
☎ 0272-31-7221 (内線2584) FAX：0272-32-2285
- 第37回ブドウ球菌研究会
日時：平成4年9月10, 11日(木、金)
場所：おかやま三光荘703岡山市吉京町1-7-36
演題締切：7月10日
問合せ先：第27回ブドウ球菌研究会事務局荒田次郎
〒700 岡山市鹿田町2-5-1
岡山大学医学部皮膚科学教室内
☎ 0862-23-7151 (内線2515) FAX：0862-25-1640

このニュースは春、秋2回、日本細菌学会関東支部総会の一カ月前に発行しております。

皆様の集会予定をお知らせ下さい。

< 集會報告 >

第26回緑膿菌研究会(会長橋本一, 群馬大・医)は, 群馬県水上において, 平成4年1月31日朝から2月1日昼までの一日半シンポジウム形式で開催されました。参加人員は約150名, 30日と31日の二晩, 水上温泉のホテルに泊り, 学問と親睦の時を過ごしました。

内容は, シンポジウム演題27, 一般演題17からなり, I. 菌学的諸性質(分離, 分類, 形態, 遺伝); II. 病原性因子(エラスターゼ, 外毒素, 菌力, サイトトキシン); III. 薬剤耐性(β -ラクタマーゼ, 外膜透過性, PBP); IV. 感染防御(好中球, 細胞性免疫, プロテアーゼの病原性発現, サイトカイン); V. 臨床(外科, 小児科, 眼科, 呼吸器・尿路・感染, 敗血症); VI. 治療(抗菌剤, マクロライド, 併用, G-CSF, M-CSF, 抗体)について, 活発な討論が展開されました。

当シンポジウムの内容は, 後日, 本として出版されます。

議 事 録

●臨時評議員会

日 時 : 平成3年11月5日(火)

16時~18時

場 所 : 昭和大学

出席者 : 新井俊彦, 五十嵐英夫, 池田達夫, 井上松久, 金森政人, 河野恵, 島田俊雄, 鶴純明, 島村忠勝(支部長), 江川清, 戸田真佐子(幹事)

欠席者 : 岡村登, 奥田克爾, 黒坂公生, 壇原宏文, 光岡知足, 三上要

議 題 :

1. 支部長推薦評議員の選出が行なわれた。各委員から出された12名の候補者の中から, 選挙の結果, 地域, 専門および年齢層などのバランスを考慮して協議の末, 伊予部志津子, 内山竹彦, 北野繁雄, 笹川千尋, 竹田多恵, 辨野義巳, 野沢龍嗣の7名が選ばれた。
2. 遠距離からの評議員の交通費に関して, 査定は支部長に一任することになった。

●第1回評議員会

日 時 : 平成4年1月18日(土)

14時~17時

場 所 : 昭和大学

出席者 : 新井俊彦, 五十嵐英夫, 池田達夫, 伊予部志津子, 内山竹彦, 岡村登, 金森政人, 黒坂公生, 笹川千尋, 島田俊雄, 竹田多恵, 鶴純明, 野沢龍嗣, 辨野義巳, 光岡知足, 金ヶ崎士朗(第68回支部総会長), 島村忠勝(支部長), 江川清, 戸田真佐子(幹事)

欠席者 : 井上松久, 奥田克爾, 河野恵, 北野繁雄, 壇原宏文, 三上要

議題に入る前に支部長挨拶および新評議員の自己紹介がなされた。

臨時評議員会議事録の承認。

議 題 :

1. 島村支部総会長より第67回支部総会の準備状況の説明がなされた。

開催日 : 平成4年6月19, 20日(金, 土)

会 場 : 昭和大学上條講堂

演 題 : 一般演題のみ。

A. 一般演題: 講演10分, 討論: 5分

B. 解説的演題: 講演20分, 討論: 5分

参加費 : 一般: 3000円, 学生: 1000円

抄録集 : 予約価800円, 当日1000円

懇親会 : 20日(土) 18:00~20:00

2. 金ヶ崎支部総会長より第68回支部総会の準備状況の説明がなされた。

開催日 : 平成4年11月5, 6日(金, 土)

会 場 : 東大医科研(シンポジウム, 一般演題, 懇親会), 国立公衆衛生院(一般演題)

シンポジウムI 宿主防機構解析の最近の進歩(成内秀雄, 中村三千男)

シンポジウムII Compromised hostと細菌感染(島田馨, 五島磋智子)

シンポジウムIII 細菌と生体のコミュニケーション(光山正雄, 笹川千尋)

懇親会 : 11月5日(木) 18:00~20:00

3. 支部長より平成4~6年期の評議員会のスケジュールの説明がなされた。
4. 小委員会委員長および委員の選出が行なわれた。○印は委員長

編集委員会：○新井俊彦，黒坂公生，
河野恵，竹田多恵，三上襄
学術委員会：○野沢龍嗣，伊予部志津
子，奥田克爾，壇原宏文，鶴純明
組織検討委員会：○笹川千尋，五十嵐
英夫，池田達夫，岡村登，島田俊雄，
光岡知足
事業計画委員会：○北野繁雄，井上松
久，内山竹彦，金森政人，辨野義巳

＜人事消息＞

橋本一先生 群馬大学医学部微生物学を定年
退官され，北里研究所生物機能研究所へ。
横田健先生 順天堂大学医学部細菌学を定年
退職，順天堂大学医療短期大学学長に就任。
河西信彦先生 昭和大学薬学部微生物薬品化
学を定年退職。
中瀬安清先生 北里大学薬学部微生物学を定
年退職，北里研究所監事に就任。
壇原宏文先生 北里研究所より北里大学薬学
部微生物学教授に就任。
野瀬清先生 東大医科学研究所より昭和大学
薬学部微生物薬品化学教授に就任。
渡辺武彦先生 日本歯科大学微生物学教授よ
り同大学共同利用研究所教授に移籍。
清水文雄先生 東北大学歯学部より日本歯科
大学微生物学教授に就任。
深沢義村先生 山梨医科大学微生物学定年退
官。

◇編集委員会からのご挨拶◇

これから3年間，黒坂，河野，竹田，三上，
新井の編集委員会で支部ニュースを担当させ
て頂くことになりました。支部ニュースは，
毎年春秋2回，支部総会の約1カ月前に発行
いたします。春の第17号の発行期日が迫って
居りましたので，皆様の編集に対するご意見
を頂かずに始めてしまいましたが，随時ご意
見に従って改めていきたいと思っております。
一応，評議員にアンケートを行ない，編集の
参考にしました。アンケートへの回答では，
会員に投稿して頂く頁を増やす希望が多く，
その内容では，研究紹介が最も多く，分野別，
特定テーマ，ミニミニレビュー，支部会の演
題内容，大学，研究室などの紹介記事が求め
られました。また，体験談や随想の希望もあ

りました。

これらのアンケート結果を参考にして，
平成4年2月13日に編集委員会を開きました。
委員全員が出席し，江川幹事の立合いのもと
で，編集方針と17号の原稿を依頼する人選
をいたしました。

結果がこのニュースですから，読んでいた
だけ判ることですが，一般的にはこれま
での方針を踏襲することとし，フォーラム欄
の拡充，掲載希望内容をそれぞれの欄の編集
に配慮することとしました。また，人事消息
を入れることにいたしました。

まだ，なれない編集委員ですので，手落ち
も多々ある事と思いますが，皆様のご協力で
良いニュースにして行きたいと思っております。
(文責 新井俊彦)

◇編集後記◇

新しく編集委員会が組織され，新井委員長
を始め各委員の先生方には，魅力ある支部ニ
ュースの発行に向けてたいへん熱意を示して
います。できるだけ多数の先生方にご投稿い
ただくことと，会員各位に益する情報を多く
集め，提供したいと考えています。アンケー
トに基づき，極力これに合わせて私共の第1
号発行の運びとなりました。新しい試みとし
てはフォーラムが拡充されたこと，年度始め
によせて人事消息をお知らせした事です。

記事集めに新井委員長の多大なご努力があ
りました。3年間春秋の計6刊に限られるの
で，フレッシュ感覚をどれだけ盛り込めるか
未知数ですが，どうか忌憚のないご意見をお
寄せ下さい。(T. T.)

日本細菌学会
関東支部ニュース
第17号
(1992.4.30)

発行：日本細菌学会関東支部
〒142 東京都品川区旗の台1-5-8
昭和大学医学部細菌学教室内
☎ 03-3784-8131
